公益財団法人 日本骨髄バンク 臨時理事会 議事録

1　日　時　　2022 年（令和 4 年）2 月 18 日（金）　17 時 10 分から 18 時 40 分

2　開催方法　ＷＥＢ会議
（本会議を WEB 開催することに関して全理事の同意を得た）

3　定足数
（１）出席理事 ： 12 名 / 現在数 14 名（以下五十音順、敬称略）
小寺 良尚（理事長）、加藤 俊一（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）
浅野 史郎（理事）、大久保 英彦（理事）、岡本 真一郎（理事）
金森 平和（理事）、鈴木 利治（理事）、瀬戸 愛花（理事）
高梨 美乃子（理事）、高橋 聡（理事）橋本 明子（理事）
注）定款第 46 条に規定する理事現在数の過半数を充足し、本理事会は成立した。
（２）欠席理事 ： 2 名
鎌田 麗子（理事）、谷口 修一（理事）
（３）出席監事 ： 2 名
椙村 岳央（監事）、藤井 美千子（監事）
（４）陪 席 者 ： 2 名
山崎 翔（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室室長補佐）
佐久間 清光（公認会計士）
（５）事 務 局
小川 みどり（事務局長）、田中 正太郎（総務部長）
小島 勝（広報渉外部長）、中尾 るか（ドナーコーディネート部長）
関 由夏（移植調整部長）、戸田 泉（ドナーコーディネート部ＴＬ）
渡邊 善久（広報渉外部ＴＬ）、竹村 肇（総務部）、荒井 茂（総務部）
上原 淳（総務部）

4　開　　会
小寺理事長が臨時理事会の開会を宣言した。理事会運営規則第 3 条に基づき、事務局の出席が認められた。

5　議事録署名人の選出
定款第 51 条第 2 項により出席した理事長及び監事が議事録の署名に当たるとされた。

〔 議 事 〕
6　審議事項
第 1 号議案 ： 令和 4 年度事業計画案と予算案の原案提示
第 2 号議案 ： 事務局の管理職人事案（非公開）
第 3 号議案 ： 倫理委員会委員交代

7　報告事項

1) 凍結による骨髄バッグ破損事例（安全情報）

2) 2021 年度コーディネーター養成研修報告

3) 調整医師の新規申請・承認の報告

4) 寄付金報告

5) 移植件数報告

8　審議事項の経過概要と結果（敬称略）

1)　第 1 号議案 ：令和 4 年度事業計画案と予算案の原案提示

小川事務局長が資料に基づき説明した。

令和 4 年度の事業計画書案である。1 頁目は概要で現在の状況である。データを主に載せている。コロナ禍で色々な数字が落ち込んだが、昨年度は元に戻りつつあるという内容である。次に事業実施の基本方針について 5 つ挙げている。

1 番目、若年層を軸とした提供応諾率の高いドナー獲得。大学での登録会を推進する。ＳＮＳ活用、ＷＥＢ広告等で新しいアプローチを検討する。若年層が多く訪れる献血ルームに説明員を配置、これは既に行って結果が表れているもので継続する。オンライン登録に向けた体制整備を進める。スワブを用いて最初のドナー登録のＨＬＡ検査をできるように継続検討する。ユースアンバサダーによる普及啓発にも努める。

2 番目、応諾率向上に向けた社会環境整備とドナーリテンション推進。公式ホームページ、ＳＮＳでの発信により情報提供を強化する。住所変更届出を促す内容のＳＭＳを送って住所不明者を減らす。せっかくコーディネートに上がってもドナーの住所不明で最初の開始シートが返送される例があるため、その対応策である。またドナー休暇制度と同様に大学への公欠制度にも取り組む。

3 番目、リモート面談を活用したコーディネートの効率化。こちらは既にコロナ禍において一部取り入れているが、さらなる活用を検討する。リモート面談により感染リスクを回避できるだけでなく、ドナーの利便性を高めコーディネート期間短縮につなげる効果が期待できる。

4 番目、コーディネート期間短縮に向けた移植最適時期での採取をめざす取組み。昨年 7 月にワーキンググループを立ち上げて、早期連絡コースの導入、確認検査判定方法の変更などを検討した。それらを実現すると共に期間短縮の実現に取り組む。

5 番目、国内・海外関連組織との連携強化を継続する。

（主な意見）

＜橋本＞　これを実現していくにあたって事務局の手応えはどのような感じか。

＜小川＞　例えば広報渉外部について、今までになかったような取り組みを次々進めている。外部組織との連携もかなり深く強めている。いろいろな人の力を借りつつ、しかも中の事務局員が本当に一生懸命に取り組んで、今少しずつ実になっているところである。他の部も同様に感じている。引き続き皆様にご教示いただきながら今後も進めていければと思っている。

＜小寺＞　実際の審議は 3 月の通常理事会ということになる。それまでにもし加えた方が良いとか削った方が良いとかあれば事務局にお知らせ願う。

続けて田中総務部長が資料に基づき説明した。

予算案について説明させていただく。例年は正味財産増減計算内訳表を使って説明させていただいているが科目が多くて細かいため、簡略版で要点を絞って補足を入れながら説明させていただきたい。簡略版の下半分に今回の予算の要点をまとめて記載している。最初に収入と支出の差し引きである。令和 4 年度は約 2000 万円の赤字予算を組んでいる。2000 万円の赤字ではあるが、患者負担金軽減積立金から取り崩し予定が例年 1200～1400 万円程度ある。令和 2 年度の決算では 4000 万円近い黒字であったこともあり、公益法人の目標である収支相償、プラスマイナスゼロを数年の期間の中で実現させるという意味では適度な数字だと考えている。

次に収入面である。令和 3 年度の目標と同様の移植件数 1200 件、寄付金収入約 1 億 4000 万円を想定している。簡略版の令和 4 年度合計の列、経常収益計（A）の行を見ていただくと合計で約 15 億 1800 万円の収入を見込んでいる。ただ令和 3 年度と比べると約 1700 万円の収入減となっている。主な要因として、前回の業務執行会議でも説明したが国庫補助金 560 万円程度削減になった。またコロナ禍の国際コーディネート件数減少を実態に合わせた。またＮＭＤＰとの費用発生に関するルール変更があった。具体的に言うと今までドナー確定の段階でいただいていた費用が確認検査まで進まないといただけなくなったというルール変更である。これらが主な収入源の要因である。

次に支出面である。経常費用計（B）が支出の合計である。約 15 億 3800 万円となっている。職員の人件費が約 2000 万円増加している。現在のバンクの人員構成上、まだ退職者が少なく定期昇給した分人件費が上がってしまうことが要因として大きい。新たな試みとしてバンクニュース 7 月号の郵送をやめて代わりにショートメッセージで発行のお知らせを送信する。ショートメッセージの送信費用もそれなりに掛かるが、郵送費と印刷費合わせて 2000 万円強の経費削減を考えている。この削減額の一部を利用するという形で老朽化している公式ホームページの刷新を計画している。13～14 年前のものがベースになっていて見難いとの意見をいただいている。高額になってしまうことが想定されるため令和 4 年と 5 年にまたがって 2 か年計画で考えている。次にコーディネーターの活動費について若干の見直しを計画している。全体で約 300 万円の増加を見込んでいる。また 2 年ほどコロナ禍のために実施できていないコーディネーターの対面でのブラッシュアップ研修会の費用を計上している。実際の開催有無はコロナ禍の状況によって慎重に判断する。次に収入と支出の両方に関わるところであるが、コーディネート支援システムに係る日赤からの業務委託が令和 4 年度は運用保守業務の契約を結ぶ予定になっている。契約や請負範囲は日赤と調整中で、現時点では収入支出共に未入力になっている。記載していないが、その他に令和 3 年度に計上していた 30 周年記念関連の費用は令和 4 年度には発生しないことで約 600 万円の支出減である。あとリース費用が約 700 万円支出減となっている。令和 4 年度の支出の合計は令和 3 年度と比べて約 1100 万円減る見込みである。一番下に積立金関連と記載しているが、来月の理事会で詳しく説明させていただき承認を得たいと思っている。

最後に資料はないが、令和 3 年度の予算執行状況である。もともと 1300 万円の赤字予算で組んでいたがコロナの影響で 2 月から 3 月の移植件数が不透明な部分があるが、1300 万円赤字の予算から大幅に離れた数字にはならないと考えている。

（主な意見）

＜大久保＞　新たな試みとしてバンクニュースの郵送を止めてショートメッセージで

の発行ということだが、非常に大きなことなので事業計画に盛り込んだらどうか。ホームページの閲覧を薦めることとするという形で案内したら良いと思う。例年寄付者にはバンクニュースを発送していたと思うが、これも止めるのか。

＜田中＞　寄付者には継続して郵送する。

＜大久保＞　発行時期に寄付者のボリュームが多いので大事だと思う。

＜田中＞　事業計画にも加えさせていただく。

＜小寺＞　コロナ禍ということもあり収入支出共に縮小予算ではある。佐久間会計士から何かご意見はあるか。

＜佐久間＞　特にない。

＜橋本＞　郵送する人もいてショートメッセージで発行するというだけで 2000 万円削減できるのか。

＜田中＞　はい。郵送費と印刷費がかからなくなるのが大きい。ショートメッセージの送信費用でも 50 万人くらいの人に送ると約 700 万円かかる。それを差し引いて約 2000 万円強の削減となる。

＜橋本＞　支出面の説明が何とか削除して減らすということではなくて、積極的に行動すればこのような支出があるという説明である。みんなで削っていきましょうという削減の話ではなかったと思うので安心した。コーディネーター活動の見直しはすごく大事なことだと思う。この人たちと対面、あるいはリモートで顔を見てという活動は本当に大切なことだと思うので、増加することを恐れないで積極的に出資して欲しいと思う。

＜小寺＞　予算案も事業計画案と同じで最終的な評決は 3 月の通常理事会で行うので、それまでご意見があればぜひ事務局にお寄せいただきたい。

2）第 2 号議案 ：事務局の管理職人事案

人事案件のため決議は非公開で実施した。審議の結果、第 2 号議案は承認された。

3）第 3 号議案 ： 倫理委員会委員交代

関移植調整部長が資料に基づき説明した。

倫理委員会委員の変更についてである。現在副委員長をしてくださっている掛江直子先生から辞退の意向が示されたため、新たに甲畑宏子先生にお願いしたいと考えている。東京医科歯科大学生命倫理研究センター所属で遺伝カウンセラーをしている。略歴は画面に表示している通りで、お茶の水女子大学を卒業している。東京医科歯科大学では 2014 年から生命倫理研究センターにいる。資格として認定遺伝カウンセラーを持っている。甲畑先生に倫理委員をお願いして良いか審議いただきたい。

審議の結果、第 3 号議案は全会一致で承認された。

（主な意見）

＜小寺＞　遺伝カウンセラーが専門か。

＜関＞　はい。東京医科歯科大学生命倫理研究センターという所は、主に研究倫理審査の支援業務を中心に業務を展開していると聞いている。

＜小寺＞　掛江先生はバンクだけでなく随分長く骨髄バンク、臍帯血バンクその他の立ち上げの頃からご活躍なさった訳であるがこの度、辞意を表明されて甲畑先生にお願いしたいということである。掛江先生からの推薦であるか。

＜関＞　今回は委員長である木村先生からの推薦である。

9　報告事項の経過概要と結果（敬称略）

1）凍結による骨髄バッグ破損事例（安全情報）

関移植調整部長が資料に基づき説明した。

本年１月、凍結した骨髄液がバッグの破損のため使用不可になった事例があった。今回破損したテルモ社の分離バッグは造血幹細胞の凍結保存には使用しないよう移植施設に注意喚起した。詳細については次頁以降に施設からの報告書があるのでお読みいただければと思う。骨髄液をテルモ社の分離バッグを用いて今まではマイナス 80℃の凍結保存をしていたようだが、今回は液体窒素の方が幹細胞を良好に保てると考えたようで、一旦マイナス 80℃に凍結し翌日にマイナス 196℃の液体窒素に移した。輸注日に骨髄液バッグを確認したところ破損していた。

（主な意見）

＜小寺＞　テルモのバッグは骨髄液の保存で凍結して使用したということだが、骨髄液の保存をテルモのバッグで良いとなっていたであろうか。以前に骨髄液は脂肪をかなり含んでいて、その脂肪が材質を弱めるという事例があったと思うが、加藤副理事長は記憶にあるか。

＜加藤＞　記憶にない。金森理事がドナー安全委員会にいる間に何か関与されたか。

＜金森＞　バッグについてドナー安全委員会で検討したことはない。ただ一般的な常識というとちょっと語弊があるかもしれないが、フローズバッグを使うのが一般的でこのテルモバッグは輸血の技師に聞いても普通は血漿製剤を処理したりするときに使われるのもので、細胞成分を入れて凍結するというのはマイナス 80℃でも通常はしないと伺っている。これは他の施設でも同様だと思う。そのような意味では注意喚起なのだが、マイナス 80℃を認めるかどうかというのは別の問題である。液体窒素で慈恵医科大で実験をしてもらって、ドラスティックな写真を送っていただいたが、気相でも液相でも入れたとたんに破裂している。であるからドナー安全委員会で現状どのようなバッグで凍結しているのかぜひ調べていただきたい。

＜小寺＞　これは駄目だとバンクとして、または学会として言ったことはなかったか。

＜金森＞　私がドナー安全委員会にいたときに正式にアナウンスした記憶はない。輸血学会からも細胞処理の手続きのマニュアルが出ている。そちらに書いてあるのかも知れないが確認していない。

＜小寺＞　私も古いものを探してみようと思ったが、さすがにすぐには見つからなくて、私の記憶では末梢血で良いからと言って骨髄液では良くないという事例があった。過去の事例について、いつの間にか忘れられてしまったというのは非常に残念である。当面我々がやることとしては、このようなものは使っ

てはいけないということである。
＜加藤＞　このことを契機に他のことでも我々が見落としているもの、あるいは忘れているものがありはしないか点検はぜひ必要だと思う。
＜小寺＞　過去の事例でということか。
＜加藤＞　いろいろなマニュアルとか何かである。

2)　2021 年度コーディネーター養成研修報告
中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

第 20 回コーディネーター養成研修会認定・委嘱審査結果についての報告である。去年 6 月から 12 月末までの期間で新しくコーディネーターになっていただく方々ためのコーディネーター養成研修会を実施した。今回の募集では、コーディネーターの高齢化が進んでいる中で、体力的な事情で辞退あるいは休止の方が増えてきている。不在となる地域が予想されることや、新型コロナウイルス感染症対策のためコーディネーターが他県から赴くことが難しいことから、その県にコーディネーターがいないという状況を作らないということの目的で、今回は全国から希望者を募った。
応募のなかったところもあったので、結果的に 5 地区で養成研修会を実施した。養成研修の途中で体力的な理由等で辞退された方もいて、審査の対象になったのは 20 名である。コロナの影響もあって実地研修の遅れのあった 4 名を除いた 16 名について 1 月 13 日にコーディネーター認定・委嘱審査会を開催してコーディネーターとしての適性と能力があるか厳正に審査した。その結果、今回審査対象になった 16 名全員が 2 月 1 日付で認定・委嘱という決定となり既に活動を始められた方もいる。

（主な意見）
＜小寺＞　今のところ認定したのが 4 名か。
＜中尾＞　16 名である。実地研修をまだ終了していない方が 4 名いて、その方々は実地研修が終わった後に審査して認定となる。

3) 調整医師の新規申請・承認の報告
中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

令和 4 年 1 月 5 日から 2 月 8 日の期間に新たに申請・承認された調整医師の人数は 14 名、合計 1182 名である。

4) 寄付金報告
小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

令和 4 年度 1 月末の結果を報告する。1 月の件数 1134 件、金額 920 万 3044 円をいただいた。1 月としては過去 5 年で見ると最高の金額となっている。今年度の累計は 1 万 668 件、1 億 3295 万 8052 円となっている。5 年前と比較して件数、金額とも約 30%アップしている。大変ありがたい。

（主な意見）

＜小寺＞　コロナ禍でこのように多額の寄付を件数金額ともにいただいて本当にありがたい。

5)移植件数報告

田中総務部長が資料に基づき説明した。

2021 年 4 月から 2022 年 1 月末までで国内のＢＭが 721 件、ＰＢが 245 件、国際が 3 件で合計 969 件である。予算対比 81%で目標の 1200 件にはちょっと届かないのかなという状況である。

（主な意見）

＜小寺＞　昨年度と比べると回復傾向にはあるが後 2 か月、採取移植病院に頑張っていただきたい。

以　上